

いく中で、地方豪族も聖徳太子にならって寺を造るものが多く出てきた。阿倍氏の阿倍寺（奈良県磯城郡阿倍）、太秦氏の広隆寺（京都市右京区蜂岡町）、吉備氏の吉備寺（奈良県磯城郡吉備）、等が主なものであるが、飛鳥寺の造営が始められてから三七年目の推古天皇三十二年（六二四）には、全国の寺院の数・僧尼数等が調査されている。それによると僧数八一六人、尼数五六九人、寺院四六か所が建立されていたことが明らかになっている。単純に僧尼数と寺院数とを計算すると、一寺院に三〇人ほどの僧侶たちが働いていたことになる。この四六か所の寺院は主として近畿地方を中心に調査した数と思われる。ところが、これより七〇年を経った持統天皇六年（六九二）に、再度諸国の寺院数を調査したところ、五四五か寺であったことが分かった。半世紀以上の年月の間に十数倍の寺院数になっており、天智・天武・持統と続く天皇時代に、仏教興隆に伴った寺院造立が盛んに行われたことが推測できる。これらの背景には六世紀代に渡来した渡来者集団が、仏教徒であった可能性は高く、寺院の造立や造瓦・建築など高度な技術面を前提に、仏教を媒介として、その普及に関与していたことが河内国の西文漢氏の各寺院や、豊前地方に存在する古代寺院跡等から想定される。

釈迦入滅後の寺院は、塔と金堂が存在することで成り立っていたと言われ、釈迦の仏舍利を塔に祀ることが中心になっていた

る。日本では発掘調査などで明らかになっている若草伽藍や飛鳥寺、更に四天王寺などは金堂が塔よりも先に造立されていた事実がある。なぜ塔よりも金堂なのかという疑問があるが、蘇我馬子が、仏像を祀るために家を祓い浄めて寺としたことや、仏教伝来時の仏像に対する欽明天皇の表現が「隣国の神の姿を見て喜び躍る」とあるように、金銅仏に対する尊敬の念が優先した可能性が考えられている。

塔と金堂を囲む回廊内は聖域として考えられた。伽藍の完成がそれであり、一塔三金堂の飛鳥寺（法興寺）が建立されることとなる。飛鳥寺は、昭和三十三年の発掘調査によって高句麗清岩里廢寺や定陵寺と同じ伽藍を有していることが明らかになっており、塔を中心に東・西・北方向に金堂を配し、中門と講堂を結ぶ回廊が巡る伽藍配置である。

## 二 豊前における渡来人の活動

### 渡来人と技術文化

弥生時代からと言っていいのだろうか、中国や朝鮮からの渡来人たちにより、稲作の普及・青銅器や鉄の文化・墳墓、そして人間の思想にまでも及ぶ仏教文化等、日本の文化論を形成するに至る原点がもたらされた。

特に古墳時代は朝鮮半島から移住してきた渡来人たちによって、先進技術と多くの文化が持ち込まれた。大和朝廷の支配層

の約三分の一は、渡来系の人たちであつたろうと言われている。歴史の中でその根拠となるのが一度だけあり、五世紀後半ごろ、大和朝廷は朝鮮南部の諸国と直接的に交易交渉に入っているのである。このころの朝鮮半島は、高句麗・新羅・百済の三国が成立し、東アジアの動乱時期でもあつた。四六〇年ごろ、百済王権を確立した木<sup>キ</sup>苴<sup>レイ</sup>満致が、倭国と対外交渉を積極的にすすめ、それに因んで渡来系集団が倭国に続々と入ってきた。北部九州から瀬戸内・畿内の各拠点となる占地には、今までにない先進的な思想・技術・軍事等を持った移住民が定着し、従来の土着民に属して、多くの文化をもたらしただのである。

渡来人の導入した文化の足跡は、畿内・九州等を中心に、東は関東地方一帯まで、墳墓・寺院・神社など多くの遺跡からその痕跡を発見できる。北部九州の例を挙げてみよう。

- ・ 墳墓…須玖岡本遺跡、吉武高木遺跡、竹原古墳、王塚古墳
  - ・ 官衙…大宰府史跡、その他
  - ・ 山城…大野城、水城、基肄城、鞠智城、怡土城、その他
  - ・ 雷山、高良山、女山、御所ヶ谷、その他
  - ・ 寺院…天台寺、垂水廃寺、椿市廃寺、木山廃寺、その他
  - ・ 神社…宗像大舎、香春神社、比売許曾社、その他
- 等多くの遺跡が発見され、出土遺物等から百済・高句麗・新羅系などと区別され、渡来人の歴史的背景が考察されている。

渡来系集団の中で、代表されるのは「秦氏<sup>はた</sup>」や「漢氏」である。彼らの多くは畿内を中心に移住し、倭から日本へと変わる六〜七世紀の国家形成時期に大きな役割を果たした。

「漢氏」は普通「東漢氏」のことを指しており、彼らは弁辰安邪国・安羅国などの朝鮮慶尚南道咸安地方にあつた国の人たちで、手工業技術や外交・軍事面で活躍している。始祖を「阿知使王」といい、その子供「都加使主」と共に応神天皇時代に渡来したとの伝説が『雄略記』七年の条(四六三)に書かれている。秦氏の始祖の弓月<sup>ゆづきのきみ</sup>君は秦の始皇帝の子孫であるというように、漢氏・秦氏共に出自は史実性がないと言われ、倭国へは漢氏のほうが秦氏より先に渡来した可能性が高いとされている。

「秦氏」は『古事記』応神天皇の巻に

この御世に(中略)秦造の祖(中略)参渡り来つ

とあり、更に『日本書紀』応神天皇十四年の条には弓月君の渡来伝承が記されている。秦氏は新羅系の渡来人とみる説が有力で、漢氏が官僚的なコースをたどったのに対し、秦氏は養蚕織絹を扱う繊維工業や農業等に優れ、地域の土豪的な広がりを見せている。例えば、豊前国・大和国・山城国・摂津国・近江国・播磨国等日本各地にその由来・名称・名字等が現在も残っている。

秦氏は当初、朝廷から山城の地を与えられ、そこを本拠地と

して発展した。最も深く関与したのは欽明天皇の政權時代で、国家的財政役を担っていたとされ、特に六世紀半ばには周防灘沿岸から北部九州一帯を経済的な活動範囲とし、その組織力は、『新羅姓氏録』に九二部（村落単位か）・一万八六七〇人いたとされている。そして、推古天皇中ごろには秦氏も盛隆期を迎え、その名を後世に残すほどになった。

また、秦氏は仏教の信仰集団としても知られている。漢氏ほどの実力者はいないが、聖徳太子の隠然実力者ともいえるべき「秦河勝」は、五八七年に仏教崇拜の是非を巡っての事件に、「軍の政人」を務めたという。聖徳太子に近侍し、武器・兵士・食糧・その他の軍事的責任者として献身的な活躍をしたわけである。『広隆寺縁起』（八三八）には、秦河勝は山城秦氏の首長で、聖徳太子亡き後、新羅から仏像と金塔・舍利等が送ってきて、太秦の葛野秦寺（広隆寺）を造立し、それらを寺に納め菩提を弔ったと記されている。

### 秦氏の入豊

秦氏は豊前地方にも土豪族として君臨した。

この渡来人「秦氏」が、『正倉院文書』中の大宝二年（七〇二）の「豊前国戸籍帳断簡」に明らかに記され、その所在を少なからずたどることが可能である。大宝二年の戸籍は美濃・筑前・豊前・豊後の四か国が伝えられており、記載内容から美濃国戸籍は淨御原令に、他の三か国は大宝令に依拠していると想定されている。

豊前国の戸籍帳には「上三毛郡塔里」、「上三毛郡加目久也里」、「仲津郡丁里」の三つが記されている。

『和名類聚鈔』によると、上毛郡加目久也里は上毛郡炊江郷の地で、旧山田村又は旧黒土村に「梶屋」の地名が残っていることから、小田富士雄

正倉院文書（大宝二年）  
「豊前国戸籍帳断簡」

|        |       |
|--------|-------|
| 上三毛郡塔里 | 和名類聚鈔 |
| 秦部     | 六六    |
| 塔勝     | 四九    |
| 強勝     | 六     |
| 調勝     | 一     |
| 梢勝     | 一     |
| 植勝     | 一     |
| 難波部    | 二     |
| 海部     | 一     |
| 物部     | 一     |
| 膳大伴部   | 一     |

|          |       |
|----------|-------|
| 上毛郡加目久也里 | 和名類聚鈔 |
| 秦部       | 二六    |
| 河辺勝      | 一六    |
| 上屋勝      | 一三    |
| 膳大伴部     | 四     |
| 飛鳥戸      | 四     |
| 刑部       | 二     |
| 膳部       | 一     |
| 浴部       | 一     |
| 無姓       | 七     |
| 下毛郡上身郷   |       |

はこの両地の一方を加目久也里と推定しているようである。ただ見逃せないのは、奈良時代に豊前市大村付近に「炊江庄」が置かれており、旧山田村から旧黒土村一帯にその地を広げる必要があるかもしれない。更に「男三一人、女四三人、奴婢一二人」とあり、家族人数は八七人、二七人、一六人の三戸が記されている。律令制時は一家を一戸と見なしてはいなかったようで、戸は集落の単位の可能性があり、三戸

|        |       |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |
|--------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 物部     | 車持部   | 鴨部     | 大奉部    | 日奉部    | 宗形部    | 難波部    | 矢作部    | 中臣部    | 莒部     | 建部     | 家部     | 錦部     | 高桑部    | 生部     | 春日部    | 刑部     | 無姓部    | 不詳     |
| 四      | 三     | 三      | 二      | 二      | 二      | 二      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 一      | 四      | 二      |
| 仲津郡狭度郷 | 仲津郡丁里 | 仲津郡大家郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 | 仲津郡高屋郷 |

という三集落を示していることも考えられる。ちなみに律令制によると「里」は五〇戸からなり、霊亀元年（七一五）に郷に改められている。それぞれの三郡里を比較すると、仲津郡丁里が最も多く、なかでも秦部と勝姓の人口が圧倒的に多いことが分かる。仲津郡丁里は直接的に『和名類聚鈔』の郷名と符合するものはないが、左記の勝姓の所在はある程度推定できる。

・阿射弥勝（仲津郡些見郷）は現在の豊津町大字些見付近

・高屋勝（仲津郡高屋郷）は犀川町大字下高屋付近

・狭度勝（仲津郡狭度郷）は築城町大字上城井付近

このことから、仲津郡丁里は京都郡を中心とした地域が想定され、秦姓の多い渡来系の人たちが在住していたことが明らかである。ちなみに「勝」姓は「スグリ」と読む向きもあり、渡来人系の小首長に与えられた姓で、後の「村主」であると言われ、各地域への土着性の強い氏族であることが分かっている。

上毛郡塔里の所在は山国川上流の旧唐原村・旧友枝村あたりが想定されている。後述するように新羅系瓦を出土する新吉富村の垂水廃寺や三光村の塔の熊廃寺の存在は、「塔里在住の塔勝」を考古学的に裏付ける資料と言える。

以上のように、上毛郡と仲津郡の秦姓と勝姓のもつ人口比率は、総人口の九五%を占めており、秦姓・勝姓をもつ人たちが前述の渡来人に通じるとすれば、豊前国は渡来人による影響が最も強い地域であったことが伺える。このことについて、小田富士雄は「上代の豊前地方における秦氏を総管者とする部民の集団が村落を形成していた」との考えを示している。

『続日本紀』によると、秦氏の部民たちは地域開発に貢献し、その主な職業は農耕と機織りであった。これを裏付ける資料に、八世紀代の平城京出土木簡の中に、豊前地方から京への貢物として「綿」と書かれていたことは周知の事実である。

時代は若干下るが、天長四年（八二七）に「勝」姓についての記事が見える。

天長四年正月丁亥、豊前国下毛郡擬大領蘇野勝宮守（略）

〔類聚国史〕卷五四・節婦の項）

彼ら渡来人の活躍が後世にまで浸透していたのを知ることができる。

### 三 採銅事業と渡来人

#### 龍骨の山と銅生産

香春岳は南から一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳と称し、近年は石灰岩の採掘が著しく、『豊前国風土記』逸文中にある鹿春神（新羅神）を祀る、龍骨の山として信仰をあつめてきたには忍びない様相を呈している。

渡来人を示す史料に『豊前国風土記』逸文がある。

豊前国風土記曰、田河郡、鹿春郷 此郷之中有河年魚在之、其源從郡東北杉坂山出、直指正西流下、添會真漏河焉、此河瀬清淨、因號清河原村、今謂鹿春郷訛、昔者、新羅国神、自度到来、住此川原、便即名曰鹿春神、又郷北有峯、頂有沼 黄楊樹生、兼有龍骨、第二峯、有銅并黄楊龍骨、第三峯、有龍骨、（略）

（『続日本紀』卷十）

文面は当時の香春町風情を詠っており、香春岳を龍骨の山（一峯・二峯・三峯）と称し、銅が生産されており、杉坂山を源とする川水は清くすみ年魚（鮎）が捕れていた。そして、「昔者、新羅国神、自度到来」と記されているように、新羅の渡来人が



写真 3—2 昭和初期ごろの香春岳